

清沢満之「道德教育について」

明治33年(1900年)愛知教育会総集会での講演

1 自己紹介・導入

今日は当県の教育会の大会を開かれるということで、そこで講演をして欲しいという要請を私の宗派の本山を通して頂きました。本山からは都合を付けてこの要請を受けるようにと言ってきましたので、こうして出かけて参った次第です。

しかし、このような場に私のような者が出てくるのは、ずいぶん失礼になるのではと思っています。私は皆様の前で喋ることができるようなしっかりした思想もありません。そういう者が喋るということはおこがましいことです。しかしこのような私をお呼び頂いたことには感謝致しますとともに、本山の命令は果たさなければなりませんので、こうして出てきた次第です。

ところが私は病人です。思想を組み立てる力ももうありません。これから申し上げることも支離滅裂でまとまった話にはならないと思います。私ひとりが信じていることについて話すことしかできません。

しかしまた、この場に出させて頂いたことは私にとって大変嬉しいことでもあります。その理由は、先ず自分は名古屋の生まれです。その自分を県下の教育大会にお呼び頂いたことは大変な喜びです。また、この第一中学は、その初め——未だ尋常中学として生まれる前、さらに県立学校として生まれる前——は、官立学校でした。外国語学校と称していた時でしたが、私は創立の初めに入学してお世話になりました。その講堂で図らずもこうして皆様の前に居るということは、当時を思い出し、今昔の感を覚えて喜んでいるところです。この喜びに応ずるようなことを、何か申し上げたいと思いますがなかなか難しいことです。なぜかというと、第一に自分の知識が足りません。次に自分の行いもはなはだ拙いものです。

このような私に本日は道德教育について話すようにというご依頼でしたが、はたして有益なことが話せるかどうかわかりません。また、これからお話することが道德教育の内容になるのかどうか、自分でも判断できないところがあります。

私はご覧の通りの姿〔僧形で演壇に立ったと思われる〕ですが、十六歳で坊主になるまでは名古屋におりました。坊主になってからは専らその方面の教育を受けて現在に至っております。したがってお話する内容も坊主の専門の考え方のほかはないのです。

今日では坊主が業としてしているところの仏教というものは道德教育に深い関係がある、道德教育の基礎になりうるという見方も世の中にはあります。そういう見方からすれば、仏教の話を申し上げるのは道德教育の講演になるだろうと思います。

しかしまた、坊主の本分から言えば、道德教育になるか否かにかかわらず、仏教というものは人間として信じなければならぬものである、という決着になりますのでその立場から話をしていくとお聴きの皆さんは、ずいぶん大袈裟なことを言う、思いのほかのことを言う、という感想を懐かれるかもしれません。道德教育に限った場合はそこまで踏み込む必要性は無いのかもしれませんが、しかし、関係してしまうことはやむを得ないことです。この点を予めお断りしておきます。

2 道德の基礎

さて、世の中の事は自分の予想や期待を超えて動くものであると感じます。道德教育についても、道德、道德と言いつつ教え込んで、どれだけの効果があるのかということがあります。道德などとりたてて言わなくとも、立派な道德教育になっているということがあります。道德教育をしなければならぬという主張と、実地の教育の結果とは別の事と思います。そして、道德教育は実地で行うことが主となりますから、口に論じ筆に述べることは、少くも違っていてはかまわないとも言えます。何も知らないような、知識や思想については何の特長もない人物が、思いのほか立派な行い

をすることもありますが、しかし、そういう行いができる人の場合、その行いを起こす基礎が確かでないといけないものではないとも思います。この基礎を把握することはかなり難しいと言わなければなりません。

道徳上の基礎となると、その他の学問における基礎と違って、理屈に収まらないことが問題になるように思います。そういうことが問題になるかならないかは、最終的には皆さんそれぞれのご経験によって判断して戴かなければならないことです。

そして宗教、とくに仏教から申しますと、その基礎を作るということが最も重要です。その基礎に達しない間は[その人が、あるいはその人に向かって]千言万語を述べ立てても、実は訳が分からない状況にあるようです。基礎を作るということはそれをただ述べるのみでなく、実際にその言葉に依って感じるという、皆さん各自の心の状態が最も大切になります。この基礎とそれに依る心の状態の二つが一致しなければ、本当に解ったというところには至りません。

しかし、だからといって私の述べるところが皆さんが納得できるようなものになるだろうかという、到底そうはならないだろうと言わなければなりません。納得させられないのに話すのは無用かもしれませんが、そのうちのある部分をご記憶に残って他日ご参考の一端にはなるのでは、というかな希望は持っています。

3 基礎＝因縁果

基礎を作るとはどういうことか。これについて坊主の言うことは決まっています。「因縁」というものの外にはありません。

「原因」というものと、それに対する「縁＝条件」というようなもの、その原因と縁＝条件が寄り集まって調子の合ったところで「結果」を生ずる。「因縁果」この外にはありません。

天地の間にあるどれほどの広大なことでも、どれほどの愉快的なことでも、因と縁と果に収まらないものはない。それを通常は「因果」とか「因縁」と言っています。具体例を挙げます。

今日、総ての学問の説明に用いられる天地の現象はすべて因縁果の例となります。あえて古くさい坊主流の説明を持ち出す必要はありません。原因というべきものがどれだけあったとしても、それに対応する縁＝条件がなければ、結果は生じません。こういう説明のしかたをすれば、天地の間のすべての現象を説明できます。

教育についていえば注入的教育[つめこみ教育?]とか開発的教育[ゆとり教育?]とかいいますが、坊主から言えば教育も因縁であるといえる。

注入ということでは、教師だけが立派にすればよいということになって、原因[＝生徒]をおろそかにして条件[＝教師]ばかりを重視する。しかしこれではうまくいかない。原因に条件＝縁が適合しなければならぬ。

それならばと、開発ということでは、子供がそれだけの性能を備えているのだから、ほうっておいても自然に能力は現れてくる、と言ったところで、原因ばかりを重視して原因の発達するべき条件を顧みないとうまくいかない。

本当の教育とは教員と生徒が相対して一方が縁＝条件となり、もう一方の原因にうまく適合しなければならぬ。そのときはじめて本当の知識の開発が行われてくるということは、今日では明かなことだと思います。これを坊主流に言えば教育のこのような主義は、三千年の昔に既に釈迦牟尼仏が発揚していた、ということになります。

さて現代の教育について言えば、教員が自分が優れた知識を持っているからといって、それを勢いにまかせて述べてしまえば、未熟な生徒はその影響を決して受けるものはない。これは条件が原因に適合しないからです。それを生徒に適合するように言って聞かせる、すなわち高いところの知識を備えた教員諸君が、低いところの下って幼稚なことも言って聞かせる、そこではじめて生徒の程度に適合して生徒が進化発達する。

いわゆる熟練した教員の方々の授業は、実につまらない平々凡々な内容にもかかわらず、その人が非常な教育の手腕を備えた人であるということをししばしば聞きます。つまり因縁が適合することが必要だということでしょう。しかし、だからといっていつでも平々凡々なことを言わなければならないか、というとそうではない。生徒の知識が進歩するにしたがって、段々と程度を高めて教授していくとき、本当の効果が出る。このような例でお話しさせていただきましたが、皆さんのご経験から、なるほどと賛成してくださるのではないのでしょうか。

初めて教員になった人の教え方を聞いてみると、生徒は先生の授業がさっぱりわからないと文句を言う。先生は生徒が分かろうとしないのだという。しかし、生徒は「先生が分からないのだ」と言う。なるほど、生徒が分かるように教えることのできない先生は「先生が分からないのだ」と言っても差し支えないでしょう。

このように、因縁果の理法に依らなければ本当の教育というものの説明はできないと思います。道徳教育に至ってはこれが一層重要である。道徳教育を修身の教科書とか倫理で熱心にやったところで、聞く方の耳がそれに適していなければ、さっぱり役に立たない。かえってそれらを嘲笑するというようなことになる。これではせつかくの倫理道徳も何にもならない。したがって因縁果の理法に鑑みてやらなければ、効果は現れるものではない、と言ってよいと思います。

人為的に行うことについては法則としての因縁果の真理に注意するということが最も重要であると思う。しかしこれは、まだここでは方法としての段階の話です。「道徳教育の基礎としての因縁果」を問題にするときは、さらに深い意味に進まなければなりません。

4 実地との相応

〔普通に〕「法則」と言われる程度の扱いで〔道徳を〕やかましく教育しようとしていては、全く不十分である。そんな法則ではない実地が大切である。

その実地とは、因縁果の理法から言えば、我々人間というものは非常な性能を備えているものである。そして人間は無限に開発し得べきものである。この一事を自分自身において信ずることが可能でなければならない。いわゆる自暴自棄はあくまで排斥しなければならない。

また、たいていの人は自分の能力の可能性を自ら限ってしまうが、これが無限に発達していく上で弊害となる。自ら限るとはどういうことかという「自分はこんなものであるから、もうここから上に進むことはできない」といって自暴自棄になることです。そのとき人間の発達が止まる。止まるとその人の品性が下がってしまう。

これに対して「自分は非常な性能を備えたものである、どこまでも発達するものである」というところに立つことができ、その立場で精神気力を養う。そこにおいて本人の品性が高まるようになってくる。これがすなわち道徳教育上の基礎であると思う。

この立場はわけもなく得られると思われるかもしれませんが、しかし、実際はこの立場が顧みられることが無いために、社会は様々な問題を抱えている。

今日、たいていの人の考え方はどういうものかという、食うに困る、寒いと凍えるというような事を重大と思っている。また自分の命が無くなるということを人間としての最大事としている。そして、これらの事が起こってくると動転狂乱する。これはすなわち品性の墮落である。その本人が自分自身を忘れたのである。こんな立場においては〔道徳の〕本当の基礎の開発はできない。この一点に先ず腹が据わらなければならない。

あまり順序立てて話してはおりませんので〔坊主の〕我田引水のようなのですが、人間というものは死生を超脱するということができないかぎり、価値は無いと私は思う。死する、生きる、ということは天地の法則で決して免れることはできない。因縁果の理法によれば、その因縁が合って時節が至ったときには、生まれるものは生まれ、死ぬものは死ななければならない。そんな事に驚くべきではない。

死ぬ、生まれるということに驚き恐れることがなければ、食うとか着るとかいうことは、そもそも取るに足りないことである。食うとか着るとかいうことが、取るに足りないこととすれば、我々が平生日夜にすることは何かというと、実につまらないことにあくせくしているということになる。その中でいらない立腹をしたり、いらない争いを起こして貴重な身体と心を消費しつつある。実にこれが道徳教育の基礎が立たない理由であると思う。

そこで、食うとか着るとか、もうひとつ、生まれるとか死ぬとかいうことに、驚かず恐れずという立場にどうしてなるかという、難しいことではない。自分自身で因縁果の理法について、その働きの及ぶところを十分に考える。そうして考え得たところを実際に行えばその立場が得られるのである。この立場—因縁果を知るということが人間として無限発達の基礎を得ることになる—について説明しなければなりません。

5 因縁果を知る

因と縁との二つがあって、適合するところで結果ができてくるというときには、そこにどれだけの考えが籠もっているのか。

まず因については、縁に合うだけの性質が籠もっていなければならない。そして、それに対する縁があって、因と必然的に合わなければ〔結果を生ずる〕働きを現すことはできないと言わなければならない。そこで〔一つの因に対する〕このような縁というものがどれだけあるのかというと、世の中、世界、宇宙に縁はいくらでもある、またどんな種類でもある。したがってその縁に合えば、この因がどれだけでも働きを現すことができる。この面から言えば、縁はたくさんあるから因はどこまでも発達することができると言える。

またもう一面から言えば、因は不変であることはできない。もし不変であるとするならば、結果に移ることはないから、因のまま変わらない。しかし、因縁が投合して結果に至る、ということは因が変わるということが先ずなければならない。変わるということがあれば、一度変わるものは二度変わる、二度変わるものは三度変わる、このようにしてどこまでも変わらなければならない。そうすると、因というものそれ自身に「変わらなければならない」という道理〔＝法則〕があることになる。変わらなければならないとすれば千万無量に変わらなければならない。

もう一段進んで申します。因に対する縁という外側からの事は、あるところで止まるかもしれない。縁がたくさんあったところで、それが因に働き及ばないものがあるかもしれない。また、不変なるものがあるとして、変化はそこで止まる、という考え方もある。〔しかし、そうではない。因に対して縁が働き、変化するということの〕根底を叩いてみると、原因と条件とがどうしても離れることはできない、と言える。

つまり、原因と条件の二つは別々のものではない、実は一つのものである、ということでなければならない。こうなったとき、原因と条件とが合わなければならない、という法則の基礎が出てくる。これによって、原因と条件とが適合するということが成り立つと考える。

どのように適合するか。原因と条件とが全く異なるもの、たとえば水と油のようなものなら、決して一つにはならない。原因と条件とが一つに適合できるのは、両者が相感じて合一することができるのだと言わなければならない。

人間を例とすれば、朋友どうしが信じ合ってこちらの言うことが相手に通じると言える。これがもし敵どうしであれば何も通じない。二つの石を近づけたようなことなら感じ合うことはできないと言える。しかし、感じ合うことが起きるのは、つまりは朋友相互が感じ合うということと同じである。すべての人間の倫理的な事柄は、この感じ合い応じ合うという感応同合ということがなければ、決して美しく成り立つものではない。今言っているのは人間のことで、低いレベルの話ではない。

人と人の間に行われる、感じ合うということがらは、天地の法則である。この説明が一般的にはどうもすると、物質の原子がどうだ分子がどうだというところからからはじまってしまう。そうすると、人間

の身体はいくつかの元素からできている、脳髄も神経も物質の元素からできているということになってしまっ、このような仕方て人間を説明しようとするから行き詰まる。

唯物論ははじめは面白いのだが、あとになると必ず行き詰まる。この考え方では、我々が感ずることができるのはどうしてか、精神的現象がどうして起こるかという説明ができず、機械的な説明だけになる。人間を機械的に説明してしまっは、人間の首を切るのは大根を切るのと同じことになってしまう。

このようになってしまっのは、根本が間違っていると思う。根本は「人間が知る」というところにある。天地の間の事を知るとは、人間が知るという行為が知識となるのだ。だから人間において最も大切な働きは、知るという行為を成り立たせるところの根本である、と言わなければならない。すなわち、人間の働きの中で最も根本となるものは、人間相互が感ずるということである。感ずるというところから総てが起って知情意が起っ、物を知るとか動くとか欲するという働きができてくる。つまり、相感ずる、相応するということが無ければ、総ての働きができない。そしてそこからはじめれば、総ての説明ができることになる。

(演台に置いてあるコップを指し)ここにあるコップのような機械的なものは、精神的な働きの度合いが低いのです。植物は精神的働きの度合いが少し高まってくる。動物はそれがさらに高まってくる。それから、人間の神経の働き、精神の働きという風に高まってきて、これらすべては同一種類の働きであっ、下等な状態と高等な状態との違いがあるだけで別種のものではない。

ここからの説明は仏教的には万物は唯心のほかはないとか、万法は唯識であるというように展開しますが、今はそういう説明の仕方はしません。我々が感ずるということが宇宙の根本の働きであるということを基礎に置きます。すると、その感ずるとはどういうことかという、二つのものが互いに感ずるということである。

6 西洋思想における解釈

互いに感ずるという言い方は、通常は相手がこちらを刺激したから感じる、というように相手と自分とを対立させます。しかしこのように相手と自分を立てることは間違っなのです。そのように相手と自分を立ててしまっ、相手が刺激したから自分が感じる、自分が刺激したから相手を感じるという説明の仕方を取らなければならないなくなり、それによって今日、学問的基礎の理屈が決定できず混乱してしまっています。

経験論者のように総てを経験から説明しようします。そうすると、相手から刺激を受けるということは受動的です。受動的という説明のしかたはどうしても能動的と言えない。経験が根本である以上、それは受動的であっどこまでつきつめても受動的です。能動的の説明ができない。能動的の説明ができないかぎり理論としては不完全です。[ひとつのものについて]あるときは受動的、あるときは能動的ということとはできない。[そしてこのような受動的、能動的のどちらも否定する立場に至ります。]受動的でもなく、能動的でもない二つのものがあるとなれば、その二つのものが互いに同じように感じ合、これが因縁であると言わなければならない。

その感じるということは、自分が相手より先に在って[感じる用意をして]待っているのではありません。[自分と相手が]同時に感じ合ということです。それは、相手には感じるに至るまでの独自の過程があり、自分にも感じるに至るまでの独自の過程がある。その相手と自分のそれぞれの独自の過程が実は一つのものであるから感じ合ということが成り立つと言わなければならない。

このような説明の仕方を取ると、どんな状況でも説明できることとなります。これに対して相手と自分というものを立てて説明しようすると、必ず行き詰まることとなります。このような見方を得て、歴史的な問題を省みると、[相手と自分、能動と受動という]この問題が人の頭を非常に苦しめたということが見えてきます。この問題を仏教の立場からとらえようとするとき、哲学が良い題材になるので、哲学の話をしします。

近世の哲学の大問題が何であったかという、相手と自分という二つの点です。デカルト、スピノザ、ライプニッツ、みんなこの二つの点の働きの説明ができなかった。それはどうしてかという[相手と自分という区別を離れることができず]こちらから[=能動]とか、あちらから[=受動]という説明のしかたにこだわったからです。[この区別された]二つのものが働き合う説明には、こちらのものであちらのものが相感じ合うとき、そこに共通の根底を置かなければならない。こちらにあることとあちらにあることに同じ事があるという場合、それがどうして同じ事であるかを説明しなければならない。それを上帝とか天帝とかゴッドとか言って説明した。

キリスト教は神というものは天地万物を創造するという、それを基にして説明した。天地万物は千差万別である、それを煎じ詰めると二つになる。二つから一つということは難しいことであるが、この一つとは何かというと、神・ゴッドというものであると言って、その神の創造というところから説明しようとした。しかし、そうなると神そのものの説明に困ってしまって、後にはどうとう神を叩き伏せることに掛かってしまった。そうならないような言い方としては、こちらの物の中に神がある、あちらの物の中に神がある、その[二つの]神は一つである、と言った。以上はご参考までに申しました。

7 因縁から見た道徳

さて、もとに戻って因縁について申しますと、因と縁というものの働きは、こちらとあちらに同じものがある。それが互いに感じ合って働くという事でなければ説明ができない。そうしますと、先ず二つのものが働く、その働くというところには、一つのものという根本があるということになります。そうして、あるものから別のものという風に順に関係を付けていくと、総てのものは互いに働いて感じ合っている。それらのものの根底が一つでなければならないというところに落ち着く。つまり、天地万物が色々離れているが、それが実は一つであるということです。これは因縁の理法上どうしてもそうなる。そこを指して仏教では差別即平等と言う。差別は色々立てられているが、そのまま平等一体のものである。

この立場から見ると我々の弊害はどこにあるのか。それはお互いが別々のもので人それぞれ違うと思うところが弊害です。[その人それぞれ違うというところで]先ず、我と言うものと彼と言うものを立てる。我の権利、彼の権利というものを立てる。権利を違いに立てるはよいが、一方が他方の権利を侵すとメチャメチャになる。財産も人の財産、我の財産と別々にしているうちはよいが、他人のものを取ろうということになると大変なことになる。

社会上の罪悪、道徳上の罪悪ということは、この我と彼との境界がありながらその実は一つのものであるということ忘れて、境界があるということだけにこだわって、その境界を詰めようとするから、争いが起きてくる。このほかに罪悪の根本の説明の仕方は無い。

したがって仏教者はこれについてどのような言い方をするかというと、先ず我というもの無くさなければならぬ。我と人との間に非常な軋轢を生じ、我と人との張り合いから総ての罪悪を生ずるのだから、この根本を退治してしまわなければならないという。

そこで今日、我々が道徳を話題にするとき、四海兄弟とか万民同胞とか仁義礼智とか言わなければならぬ。道徳においては彼の苦楽は我の苦楽、我の利害は彼の利害、天地の間の利害苦楽も皆、我が利害苦楽であるとなつたところで、はじめて真正の精神教育の根本が成り立つと思う。しかし、この立場をないがしろにして、これは人の事である、これは彼のことであると言ってしまつては、この根本が成り立たない。

したがって、根本とは我と人とは別であるが互いに一つのものであるということの決着が確定していることである。それを信じて掛からなければ真正の精神上の根本が立たない。

8 道徳の実践面

しかしながら、これは口に言いやすくして甚だ行い難いことである。すでに私がこう言っている言

葉の内で、私とあなた方との区別を見て、そこから色々な間違いを起こしつつある。もし私が一人だけで自分の部屋に居たならば、くたびれたとごろりと横になってしまうだろう。しかし、あなた方の前であるから、こうやって立っている。これはあなた方に束縛されているからです。

私があなた方を眼中に置かないで、開けた広野に居るように思って、このように立って居るものならば、かなり道において進んだ者と言えませんが、しかし予期しない事態への慎みや、恐れ避ける用意などというものは不可能であるように、一人を慎むこともできない。

そのような私が差別を見て、あなた方の前であるからと意識して、四角張っている。今日は教育大会の席だからといって辛抱している。こういうことはとても苦しいことである。それを苦しまずにさっぱりとあっさりと自由にできるとき、それが徳者だろうと思う。しかしそうではなく、この場にいるのだからそれに合わせてこんな話をしているというのは、偽道徳とまでは言わなくとも、作った道徳と言わなければならない。これでは真正に心が定まっていはいないと言わなければならない。そこで、自分が[我と人とは別であるが互いに一つであるという決着を]信ずるところから、もう一步進んで、信じたところが明かになり、それに[自分の心境が]常に適う、というようになるまで勉めることがなければ[真正の精神上的の根本に]至ることはできない。したがって自分の信ずるところを得て、その信ずるところを日夜朝暮どこまでも行っていくということに勉めるのが重要であると思う。

実行面から言えば、

まず因縁果の理法から根本は一つであるということ信じなければならない。

天地万物は一体であるということ信じなければならない。

そのためには天地万物が別々であるという根本を払わなければならない。

仏教で天地万物が一体であると言うと、そこで誤解されることがありますので、ちょっと注意します。この言い方は差別ということを見無視して平等だけを問題にする、と受け取られがちですがそういう意味ではありません。

差別の考え方での間違いは、一つ一つの物が独立の存在である、独立の実物である、というように思い込んでいるその点です。その考えを払拭しなければならない。それら[一つ一つの物]の真正の体は何かというと、別々の物ではない、一体の物である、ということになる。と同時にその一体の物がそのまま千種、万種に現れてくる。これを存在論では、現象は千差万別であるが、そのまま一つの実在である、と言います。

理論的には以上ようになりますが、日常生活になると我々は差別して一つ一つの物が独立の存在であるということにのみ偏ってしまいます。人のことはどうでもよい、自分が死ぬことだけが恐いということになってしまっている。

こういう考えは間違いであり、迷いである。しかし動物、植物などはどうかというと、差別の一つ一つが実在しているという考え方に従っているような行動がいくらでもあります。植物界はちょっとはつきりしませんが、動物界の今日まで進化してきた歴史にはこの実例があります。

今日[の一般的な説明では]、人間の目的というものとは自己保存ということが根本です。自分の利益を求めるほかに我々に希望というものが起きる動機はありません。そして、その動機が千変万化して同情とか仁愛になってきたと説かれます。これは事実上、歴史上あるいは進化論上はそうでなければならないかもしれない。しかしそのような解釈はまた[我々が先に吟味した因縁を根本とする]実際を遠く離れている。

この点について私はちょっと言いたいことがあります。脱線になるかもしれませんが、先に述べたことの基礎を防禦するためにも述べます。

進化論とか文明論とかの論調は次のようなものです。

我々は昔は下等な野蛮なものであった。そこから段々と開化して今日の文明を有するものとなった。そしてこのような働きが最初から一貫したもの〔＝進化・淘汰〕として根本にあった。

その働き〔＝進化・淘汰〕が根本であるという。しかしこれはおかしい。そのこと〔＝進化・淘汰〕を問題にするならば、我々が下等なものであったとき、そこに潜んでいた進化して向上するという因が最も大切なものである、と言わなければならない。〔その下等なときの因を無視して外側に〕根本の働き〔＝進化・淘汰〕があったという言い方をするのはちよっとおかしい。

そして歴史的経過としては進化の過程を経てきたが、それは目標へ到達するための過程で、そこで根本の大切なものは何かといえば、その目標まで行くということである。そこに行くためにこの過程を始めてきた。開始したところから、目標に行くために現れた働きが根本でないかという考えがあるかもしれない。しかし、それは行程の一番はじめに現れたというだけである。それが何のために現れたかという目標に到達するために現れたのである。我々が今日までに人間になってきたのは何のためか。それは我々はここから更に高等なものになるためです。その高等なものになったとき我々の性質は根本に達する。

「天の命ずる之を性言う〔中庸一章〕。」性に還らなければならない、という点から言うと、我々は性〔＝天命である目標〕に重きを置いて、それが少しでも現れてきたならば、そこではじめて「現れてきた」と言いうる。

例えばある人がもう一人の人を訪ねたとする。天気の話からはじめて、さて今日はこういう用事があって伺いました、要件はこうです。と言うとき、この人がそこに行って色々な話をした根本がどこにあるかという、根本はただ一つの要件を達するためです。

さて、本日この場にいる我々が根本と言うべきことは何かと言えば、我々が活動しだす土台が完全でなければならない、ということであった。完全になるとは自分を愛するということではない、自分を忘れて我と人と同一体に見るということである。それこそが最初の働きであるところを見ると、その働きが少しばかりでも今日現れてきたならば、その少しのものは人間の根本の性質である、人間としてはこれを根本としなければならない。

しかし、どうも文明論とか進化論は論調が間違っているようである。加藤弘之先生の自利の説〔出典確認〕はある面正しいことを言っている。この説は進化論の上において何が一番初めに現れたかということを経過の歴史を調べて求めているのであのように言わなければならない。ところがどうもすると同じ論調を今日の我々に適用して、我々は競争淘汰優勝劣敗で進んできたから、これから後も優勝劣敗でいかなければならない、というような主張は間違っていると思う。

競争淘汰優勝劣敗は今日の我々に至るまでに現れた主義である。しかし、ここから先へ進むとき取るべき主義ではない。

これまでは我々の知識がそれほど進まなかったため、自然に支配されて競争淘汰優勝劣敗で盲滅法にやってきたが、今日、我々の思想に道徳的、宗教的精神が出てきたのだから、その精神が働かなければならない。このようにならなければ進歩の教えとは言えないと思う。そこで、この精神においてどこまでも進み、進めるという立場がさらに出てくる。そして我々の精神はどういうものであるかという、どこまでも進むことができるものである。

どこまでも進んで行くとうなるか。これを仏教では説いていますがなかなか愉快になってくる。我々の精神がどんどん進むと天地万物中で自分の外にあるものは一つも無いようになる。一切の生き物は一つも他者ではなくなる。天地万物は皆我が所有である。一切の生き物は皆我が子であるという具合になる。これが最後の有様だとしたら、そこを目標に我々は精神を鍛錬しなければならない。

我々の今日の有様が少しはその事を思い、いくらかはそれに従って働くことができるとすれば、

さらに精神を奮い立たせ少しでも早くそこに到ろうとすることが、我々のなすべきことだろうと思う。そしてそれこそが道德教育であろうと思う。

9 道德の指針

そうすると、道德教育ということをごどのように考えて行えばよいか。我々は無限に発達しうるし、すべきである、ということを感じてそこに向かって精神を鍛錬しなければならない。そのとき先に言ったように全世界すべてのものが自分の所有である、ということになれば、天地の物に対する我々の働き方も随分違ってくると思う。禽獣までも自分の子というようになれば、今日の話題の道義とか徳義とかの観念は湧然と湧いてくると思う。

そうなれば、それまで肩を怒らせて張り合っていた者が和気あり、しなやかになって互いに手を取って語るとか、それまでは目の前の人を罪人であると思っていたことが、そうではなく自分が悪かったのだ、という風になって相手に罪を被せていたことを謝らなければならないことになる。そうすれば、それまで敵同士であったものが対立することを止めて親しくなって来なければならない。

そういうことを自分の関係の範囲にあてはめて行ったならば、それまで我々が常識と思っていたことが実は間違っていた、というように、物事に対する考え方が違ってくるということが起きなければならない。このようなことは、この中で既にそういうご経験がお有りの方がいらっしゃるかもしれません。私も未だにそこまでは到っておりません。そうでなければならないとは思いますが、実際に妻子眷属を相手にしていると腹が立つことが起きる。しかし、その時にここでの宗教的考えで反省すると、腹が立つのはこちらが悪いと、自分を責めるようになる。そうすると、存外に相手はこちらの態度によって改めて状況が善くなるということがある。[こういった体験による証明が実感されますので]個々別々なものを立て、それらの間に境界を立てて、財産とか生命とかということばかりを気に掛けるような考えは一変しなければならない。

その一変するところを仏教では転迷開悟と言います。転迷開悟とはなにか非常に特別なことを指すのではなく、このようにものごとの見方、受け取り方の変わることを言います。仏教ではこのような例を沢山書いています。一切の衆生は最上無限の仏になる性質があると言います。またこの考えを拡張して我々人間とか動物ばかりではなく、花でも瓦でも進化の程度が低いだけで、段々進化していくと最上無限に発達すべきものであると言う。我々が一つの色と感じ、一つの香りと感ずるものも最上無限に発達すべき真理を備えている。さらに言えば我々の心の中には大変な道理が籠もっている。それがうまく開けば天地万物を組み立てることができるようになる。

こういうことは奇怪不思議なことを言っているようですが、しかし、道理で推して考えていくとどうしてもそこまでいかなければならない。しかし、そういうことをあまり申し上げると皆さんの中に不思議な思いを繰り返させることになりまますから、最後にももの値打ちとういことを、ここでの道理から申し上げて終わらせていただきます。

10 物の値打ち

一つの色、一つの花の香りが無上の性質を備えているといったならば、それは無上の値打ちを持つものであると言わなければなりません。こんなふうに言うと途方もないように聞こえます。しかし我々が実際に感ずるところはどういうものでしょうか。最近、東京にいる友人から聞いた話をします。

ある人が友人が訪ねてきたので菓子を出した。その友人は日頃、菓子の好きな人であった。その人が四、五年ぶりに来たので菓子を出したのだが一向に食わない。「君、菓子を食い給え」と言っても「はい」と答えるばかりで食わない。何故食わないのかと聞くと、もったいないと言う。以前であれば菓子と見ると我先に食った人がもったいないと言って手を出さない。その友人がこんな話をし

た。

最近、自分は非常に困窮していたときがあった。旅行をしていて夜になり泊まる場所を見つけなければならなくなった。ところが宿屋は高くて泊まれない。たった五厘でもあれば木賃宿に泊まることのできるがその五厘も無かったので、野宿をして蚊に食われて苦しんだ。そのとき五厘あればその苦しみを免れたのである。ところでこの菓子是一個一錢以上する菓子だろう。あのときの困難を思いやると、そのような菓子は食えない。

と言ったということです。こういうところが我々の精神の心機一転というところ。菓子にどれだけの価値があるかといえば、経済学的に需要と供給とから難しく論じてみれば、貨幣価値は出てくるでしょう。しかし、もう一つ精神上の値打ちがあると思う。精神上からは一錢の菓子も大変な値打ちになる。天地万物のすべてがその通りです。

たとえば子供でも、この子供がどれだけの値打ちがあるかということは決まっていない。こちらから見て値打ちをつけることはできない。この子は他日大変立派な人物になるに違いないと思えば、その子が何となく貴重に見える。はたして英雄豪傑大人君子になる種があるかといえば「王侯将相寧んぞ種あらんや〔十八史略〕」で、種は決して無い。どんな子供でも他日大人物になるかもしれない。そうとらえると人物をいい加減に評価すべきではない。

それと同じように我々は自分自身をみだりに評価すべきではない。いちばんはじめに申しましたように、たいいてい人は自分自身の評価を間違う。その間違いを起こさないように、そこに「我々は貴重なる値打ちを備えたものである。千古、万古から開発し続けてきて今の自分に至り、さらにこれから先も滅しない性能を備えたものである。」という精神を持ってくれば、自分自身の値打ちは全く違って来るだろう。その違って来る精神によって、我々が毎日を生活するようになれば、はじめて、本日問題にしているところの道德教育とか宗教教育とか精神教育というものの目的を達し得ると思う。

以上まとめますと、

〔我々自身において〕因縁果の道理の確かなことが知られば、我々は大変な値打ちを持ったものである、完全無限に発達するべきものである、という心境が必ず起こってくる。

その完全無限に達し得べきであるということが真に信じられて、その立場にて自分が行動していく。

これが今日の我々の信仰上から言った道德教育を成り立たせる根本である。この立場を本当に信ずるか信じないかで働きが違ってきます。この点については言葉でいくら言っても表せるものではない。

もし私の話が少しでもご参考となるようであれば、望外の喜びです。まことにつまらない下手の長談義を致しました。

(原文)

愛知教育会総集会ニ於ケル文学士清沢満之君演説

1

今日ハ当県ノ教育会ノ大会ヲ御開キニナリマスルニ就テ一場ノ演説ヲ仕ルヤウニト云フ御思召
デ私ノ本山ノ方ヘ御照会ガゴザリマシタ、ソレヨリシテ私ノ方ヘ繰合セテ出席致スヤウニト申付ケテ
参リマシタノデ、ツイ御邪魔ニ出マスヤウナコトニナリマシタガ、併シ甚ダドウモ失敬ナ訳デ、且ツ
是レト云フ思想モゴザリマセヌ私ガ演説杯トハ嗚呼ケ間シイ次第デゴザリマスガ、先ヅ大体ハ其御
思召ノ恭ケナイト、又本山ノ命令ノ止ヲ得ザルトニ依リマシテ出マシタヤウナ次第デゴザリマス、
且ツ其上ニ私ハ病人デゴザリマス、至テハヤ思想モウマク立ちマセヌ、ドウセ申上ゲル事モ支離
滅裂纏マル所ハナカラウカト思ヒマス、自分唯一人ガ信ジテ居リマスル事ニ就テ清聴ヲ汚スノデゴ
ザリマス、併シ斯ノ如ク御邪魔ヲ致スト決シテ来マシタ以上ニハ私ニハ非常ナ愉快ヲ感ジマス、第
一ニハ先ヅ自分ハ愛知県殊ニ名古屋ノ産物デゴザリマス、其者ガ此県下ノ教育大会ニ御邪魔ヲ
スル御縁ヲ得マシタノハ非常ニ喜ブ事デゴザリマス、且亦当第一中学ハ其初メヲ尋ネテ見マスル
ト、未ダ尋常中学トシテ生レナイ前……県立学校トシテ生レナイ前ニハ官立学校デゴザリマシタ、
語学校ト申シマシタ時ニ私ハ其学校ノ建ツタ初メニ出マシテ修学ヲシテ御世話ニナリマシタ、其所
ノ講堂ニ於テ図ラズモ今日御邪魔ヲサシテ戴ク外云フノハ非常ニ……昔シト申シマスカ……今昔ノ
感ヲ生ジマス訳デ喜ブ所デゴザリマス、所ガ斯ノ如ク喜ビマスル上カラシテ何力夫相応ナ事ヲ申
上ゲタイト存ジマスケレドモ、併シ先ヅ第一自分ノ知識ガ足りマセズ、又其行ト云フモノモ甚ダマヅ
イモノデアリマスルカラ、今日ハ德育ニ関スル御話ヲ致スヤウニト云フ事デゴザリマシタケレドモ、
果タシテ其德育ト云フ事ニ裨益スル事ガアルカナキカ、

――347

又德育ノ演説ト申シ得ベキカ得ベカラザルカ自分ニモ判断ガ出来ヌ位デアリマス、自分ハ御覧ノ
通りノ姿デ、十六年迄名古屋ニ居リマシテ、十六歳ノ時ニ坊主ニナリマシテ以来ハ専ラ其方ノ教
育ヲ受ケテ先ヅ今日デハ坊主ニナツテ居リマス、ソレデ申上ゲル事モ坊主ノ専門ノ道筋ヨリ外ハ
ナイノデゴザリマス、今日デハ此坊主ノ業トシテ居ル所ノ仏教ト云フモノハ德育上ニ大層ナ関係ガ
アル、德育ノ根底ニナリ得ル事ガ出来ルト云フヤウナ世ノ中ニ説モアリマス、サウシテ見マスレバ
仏教ノ事ニ就キマシテ御話ヲ申上ゲルノハ德育ノ演説ニナラウト存ジマス、併シナガラ又坊主ノ
本分カラ申シマスト、何モ德育ニナルトナラヌニ拘ハラズ仏教ト云フモノハ人間トシテ信ゼヌケレバ
ナラヌモノデアルト云フヤウナ結着ニナリマスノデ、其点カラ論ジマスト云フト、或ハ余リ大層ラシイ
事ヲ云フ慮外〔おもいのほか〕ナ事ヲ云フト云フヤウナ御感ジモアラウカト思ヒマス、其辺ハ予ジメ
御断リ致シテ置キマス、今日德育上ト限ツタ以上ハサウ云フ事ヲ申ス訳デアリマセヌカモ知レマセ
ヌガ、併シ関係シテ居ル事ハ止ヲ得ナイ事デ是ハ御断リ申シテ置キマス、

2

ソコデ先ヅ世ノ中ノ事ハ意外ナモノデアルト感ジマス、德育ト云フヤウナ事ニ於キマシテモ、余リ
德育々々ト喧マシク云ツタ所デ扱〔さて〕ドレ丈ノ結果ガ出テ来ルカト云フヤウナ事モアリマス、ソ
ナ事ヲ云ハズニ居ツテモ非常ナ効果ガアル事ガアリマス、謂フ事ト実地ノ結果トハーツニ参ラヌカ
ト思ヒマス、ソコデ德育ト云フ事ニナリマスト実地ノ行ナフ事ガ主ニナリマシテ、ロニ論ジ筆ニ述
ベル事ハ少シ位ヒドツチニ云フテモ関ハヌ、何モ知ラヌ、知識思想ニ於テハ一向詰ラヌ人物ガ存外
ナ立派ナ行ヲスル事モアルヤウニ存ジマス、併シサウ云フ行ガ出来ルノハ先ヅドウシテモ根底ガ
確カデナイト出来ナイヤウニ思フ、根底ト云フト余程六ケシイ事デ、道徳上ノ根底トナリマスルト云
フト、外ノ学問上ノ根底トハ違フテ理窟外ノ事ガーツ出テ来ルヤウニ思ヒマス、是ハ果シテサウ云
フ事ガアルカナキカハ實際ノ御経験ニ徴〔しる〕シテ御判断ヲ願ハヌケレバナラヌ、ソコデ宗教殊ニ

仏教ト云フ所カラ申シマスルト云フト、其根底ヲ作ル

――348

ト云フ所ガ主眼デアリマシテ、夫へ達セヌ間ト云フモノハ千言万語ドレ程述立テテモ実ハ訳ノ分ラヌ事ニナルヤウデアリマス、ソコニナリマスルト云フト唯述ベルノミデナクシテ、實際ニ其言葉ニ依テカラニ御感ジニナルト云フ其御自身々々ノ状態トカ心ノ様子ト云フモノガ最モ大切ナ事デ、此ニツガウマク合セネバ成程ト云フ所ニ立至ラヌト云フ訳デアリマスカラ、唯私ノ述ベル所ガ果シテ皆サンノ御胸中ニ入ルヤウニ申述ベル事ガ出来ルカドウカト云フト、無論出来ヌト申サヌケレバナラヌ、出来ナイニ申立テルハ無用ナヤウデアリマスケレドモ、其内或ハ他日ノ御参考ノ一端トナラウカト思ヒマス、夫位ノ微カナ希望ヲ有テ居リマス、

3

ソコデ根底ヲ作ルト云フ事ハドウ云フ事ヲ云フカト申セバ、坊主ノ申ス事ハ極マツテ居ル、因縁ト云フ事ヨリ外ハナイ、原因ト云フモノト原因ニ対スル所ノ事情ト云フヤウナモノト、其原因ト事情トガ寄集ツテ調子ノ合ツタ所デ結果ヲ生スル、因縁果是丈ノ事ヨリ外ハナイ、天地間ノ事ドレ程広大ナ事ガアルト申シテモ、ドレ程愉快ナ事ガアルト申シテモ、因ト縁ト果ト此三ツヨリ外ハナイ、ソレヲ通常因果トカ因縁トカ申シテ居ル、ソコデ実例ヲ申上ゲマスレバ、今日デハ総テノ学問上ノ説明ニ用キラレル所ノ天地ノ現象ガ皆ナソレニナツテ居ル訳デ、古ルクサイ坊主流ノ例ヲ申上ゲルニハ及バヌト思ヒマス、原因ト云フモノガドレ丈アツテモソレニ事情ガナケレバ決シテ結果ヲ生スルモノデナイ、又事情ガ幾ラ備ツテ居ツテモ原因ガナイケレバ決シテ結果ヲ生ズルモノデナイト云フ所カラシテ説明ヲスレバ、総テ天地間ノ事物ヲ説明スル事ガ出来ル、殊ニ教育ト云フ事ニ於テ或ハ注入的教育トカ或ハ開發的教育ト云フ事ヲ申シマスケレドモ、坊主ノ側カラ云ヘバ矢張り因縁ト云フニ適當シテアル、注入ト云フ事モ教師サへ立派ニスレバヨイト云フテ原因ヲ措テ事情斗リニシテハイカヌ、原因ヲ基ニシテ因ト云フモノニ事情ト云フモノガ適合セヌケレバイカヌ、夫ナラバト云フテ、開發ト云フテ児ガチヤント夫丈ノ性能ヲ備ヘテ居ルカラ放テ置ケバ自然ニ開發スルト

――349

云フタ所ガ、原因ト云フモノ斗リヲ重クシテカラニ其原因ノ發達スベキ所ノ事情ヲ少シモ顧ミナイノデアアル、真正ノ教育ト云フタナラバ教員ト生徒ト相對シタ所デ、一方ガ縁ナリ事情トナツテ一方ノ原因ト云フ所ニウマク適合セヌケレバナラヌ、ソコデ初メテ真正ノ知識ノ開發ガ行ハレテ来ルノデアアルト云フ事ハ今日明カナ事ニナツテ居ルト存ジマス、矢張り坊主流カラ申セバ教育ノ主義ハ三千年ノ昔ニ釈迦牟尼仏ガ既ニ其事ヲ發揚シタモノデアアルト思フ、ソコデ教育ト云フヤウナ事ニ就キマシテモ、教員ガ強チ自分ノ知識ニ任セテ自分ガ優レタ知識ヲ有テ居ルカラト云フテ在ノママヲ吐露シタナラバ、未熟ナル生徒ハ決シテソレニ依テ影響ヲ享ケルモノデナイト云フノハ事情ガ原因ニ適合シナイカラデアアル、相当ニ適合スルヤウニ云フテ御聞カセニナル、即チ高イ所ノ知識ヲ備ヘタ教員諸君ガ低イ程度ニ降ツテ幼稚ナ事ヲ云フテ御聞カセニナルトソコデ初メテ生徒ノ程度ニ適當シテ進化發達スル、所謂熟練ノ教員ト申ス人々ハ、其教場ニ往テ見レバ実ニハヤ詰ラナイ平々凡々ナ事ヲ云フテ居ル、所デ夫ガナカナカ非常ナ教育ノ手腕ヲ備ヘタ人デアルト云フヤウナ事ヲ屢バ聞テ居リマス、矢張り因縁ノ適合ガ必要デアアル、夫ナラバト云フテ何時デモ平々凡々ナ事ヲ云フノガ必要カト云ヘバサウデナイ、生徒ノ知識ガ進歩スルニ随テ漸々程度ヲ高メテ教授ヲスルトソコデ真正ノ教育ノ効能ガ挙ガル、大方此辺ノ例ヲ持出シテ御話ヲスレバ、御經驗上カラシテ成程ト御賛成下サル事ガ出来ルデアラウト思フ、ソコデアリマスルカラシテ初メテ教員ニナツタ人ノ事ヲ聞イテ見ルト、生徒ノ方デハ困ル、先生ハ薩張り分ラヌト云フテ非難スル、先生ガ分ラヌノデハナイ生徒ガ分ラヌノダ、所ガ先生ガ分ラヌト云フ、成程生徒ニ適合スルヤウニ説ク事ノ出来ナイノハ先生ガ分ラヌト云フテモ差支ナイ、サウ云フヤウナ具合ニ、教育ト云フ点ニ於キマシテモ因縁果ノ理法ニ依ラズンバ真正ノ教育ノ説明ハ出来ナイト思フ、徳育杯ト云フ事ニ至リマスルト云フト尚一

層其事情ガ適切デア、徳育ト云フヤウナ事ヲ修身教科書トカ或ハ倫理デコチラニ於テ非常ニ熱心ニヤリマシタ

――350

所ガ、一方ノ耳ガ夫ニ適シテ居ラスト薩張り耳ヲ傾ケナイヤウニナル、却テ夫ヲ見テ笑ツテ居ルト云フヤウナ事ニナツテ、切角ノ倫理道德モ何ニモナラヌ事ニナル、ソコテ因縁果ノ理法ニ鑑ミテヤラヌケレバ何ノ効能モナイト云フテヨカラウカト思ヒマス、人為的ニスル事ニ於テハ法則トシテ因縁果ト云フ事ノ真理ガ最モ注意ヲ要スル点デアルト思フ、併シ夫ハ方法トシテ上ノ事ニナル、徳育ノ根底トシテ因縁果ト云フ事ヲ云ヒマス時ニハモウ少シ適切ナ事ニ及バヌケレバナラナイト思フ、

4

ソナ法則位ノ事デ喧マシク云フテ居テハドチラニデモ云ヘル、法則デナイ実地ガ大切デア、因縁果ノ理法カラ云ヘバ吾々ト云フモノハ非常ナル性能ヲ備ヘテ居ルモノデア、吾々ト云フ者ハ無限ニ開発シ得ベキ者デアルト云フ事ヲツ自分ニ信ズルト云フ事ニナツテ来ヌケレバナラヌ、所謂自暴自棄ト云フ事ハ飽ク迄排斥セヌケレバナラヌ、大抵ノ人ハ多クハ自ラ限ルト云フ事ガ総テ發達上ノ弊害デアルト思フ、自カラ限ルト云フハドウ云フ事カト云ヘバ、自分ハ斯ウ云フモノデアカラモウ是ヨリ上ニ進ム事ハ出来ナイト云フテ自暴自棄スル、ソコデ人間ノ發達ガ止マル、止マルト其人ノ品位ガ下ダル、サウ云フモノデハナイ、自分ト云フモノハ非常ナル性能ヲ備ヘタモノデアルトコド迄モ發達スル事ガ出来ルモノデアルト云フ所デ以テ其精神氣力ヲ養ヒ、ソレデ以テ其人ノ品性ト云フモノガ高マルヤウニナツテ来ル、是ガ即チ徳育上ノ根底デアルト思フ、訳ノナイ事デア、ヤウデア、實際上ハサウ云フ事ノ顧ミラザルガ為メニ天下ノ事ハ六ケシイノデア、今日大抵ノ人ハドウデアカト云ヘバ食フニ困ル寒イト凍エルト云フヤウナ事ヲ以テ非常ナ事ニ思フ、或ハ又生命ガ無クナルト云フヤウナ事ヲ以テ人間ノ最大事トシテ、其事ガ起ツテ来ルト転動狂乱スルト云フヤウナ事ハ何デアカト云ヘバ品性ノ墮落デア、其人々ガ自分ヲ忘レタノデア、ソナ事デハ非常ナル根底ノ開発ハ出来ナイ、此処ニツ腹ガ据ラストイカス:-:余リ近道ニ進ミマス我田引水ノヤウデア、人間ト云フモノハ死生ヲ超脱スルト云フ事ガ出来ナイケレバ人間ノ価値ハナイ

――351

モト私ハ思フ、死スル生キルト云フ事ハ天地ノ法則デ決シテ免ルル事ハ出来ナイ、因縁果ノ理法ニ依レバ、其因縁ガ合フテ其時節ガ至ル時ニハ生レルモノハ生レ死ヌルモノハ死ナヌケレバナラヌ、ソナ事ニ驚クベキモノデハナイ、死ヌル生キルト云フ事ニ驚キ恐レル事ガナイトスレバ食フトカ着ルトカ云フ事ハ抑モ末デア、食フダノ着ルダノ末ノ事デアルトスレバ吾々が平生日夜ニ為ス事ハ何デアカト云ヘバ、実ニ詰ラナイ事ニ齷齪〔あくせく〕シテ居ルノデア、サウシテ要ラナイ立腹ヲシタリ要ラナイ争ヲ起シテ貴重ナル身体ト心ヲ消費シツツアル、実ニ是ハ徳育ノ根底ノ立タザル所以デアルト思フ、ソコデ其食フダノ着ルダノモウツ生ルダノ死ヌダノト云フ事ニ驚キノナイ恐ノナイト云フヤウナ事ニドウシテナルカト云ヘバ別ニ六ケシイ事ハナイ、自分ガ因縁果ノ理法ニ就テ十分ニ其理法ノ働ノ及ブ所ヲ考ヘテ、サウシテ夫ヲ實際ニ行フテ往ツタナラバソレデ以テ今ノ事ガ出来ルノデア、ソレニ就キマシテ因縁果ト云フ事カラシテ如何ニシテ人間ト云フモノハサウ云フ無限發達ノ根底ヲ有テ居ルカト云フ説明ノヤウナ論議ソヤウナ事ヲ少シ申述ベヌケレバナラヌ、

5

大体因縁トノ二ツガアリマシテ、是ガ適合スル所デ以テ結果ト云フモノガ出来テ来ルト申シマス時ニハソコニドレ丈ノ考ガ這入ツテ居ルカ、此因ト云フモノガ縁ト云フモノニ合フ丈ノ性質ガ第一籠ツテ居ラナケレバナラヌ、是ニハ縁ニ合フ丈ノ性質ガ籠ツテ居レバ、必ズ縁ガアツテソレニ合フ

事ガナケレバ其働ヲ現ハス事ハ出来ナイト申サヌケレバナラス、ソコデ其縁ト云フモノハドレ丈アルカト云ヘバ、此世ノ中此世界此宇宙ニ縁ハ幾ラモアル、ドンナ種類デモアルカラシテ其縁ニ合ヒサヘスレバ此因ガドレ丈デモ働ヲ現ハス事ガ出来ル、斯ウ云フ側カラ云ヒマスレバ縁ハ沢山アルカラ因ガドコ迄モ発達スル事ガ出来ルト云フ事ニナル、ソレカラモウ一面ニハ此因ト云フモノガチヤントシテ居ル訳ニハイカヌ、チヤントシテ変ラナイデアアルナラバ夫ハ結果ニ移ル事ハナイカラ其モノハ其儘ヂツト居ル事ニ

――352

ナル、夫ガ因縁投合シテ結果ニ至ルト云フニ就テハ其モノガ変ルト云フ事ガ第一ナケレバナラス、変ルト云フ事ガアリスレバ一度変ルモノナラバ二度再ビ変ル、二度変ルモノナラバ三度変ル、ドコ迄モ変ラナケレバナラナイ、サウスレバ因ト云フモノ夫自身ニ於テハ変ラニヤナラスト云フ道理ガ出テ来ル、変ラニヤナラストスレバ千万無量ニ変ラヌケレバナラス、モウ一段進デ申シマスレバサウ云フ外ト側カラノ事ハ或所デ止マルカモ知レナイ、縁ガ沢山アツタ所ガ其縁ガ到底働キ及バナイ縁ガアルカモ知レナイ、又原因ガ変ル事ガナイトシテモ斯ウ云フ変ラスト云フモノガアルトソコデ止マルト申サヌケレバナラス、ケレドモ、モウツ深く根底ヲ叩イテ原因ト事情トガドウシテモ離ルル事ガ出来ナイト云フノハ、其原因事情トナツテ居ル所ノモノハ別々ノモノデナイ、其実一ツノモノデアルト云フ事デナケレバナラナイ、斯ウナツタナラバ其原因ト事情トガ合ハナケレバナラスト云フ根底ガ出テ来ル、其事ガ原因事情ガ適合シ合フト云フ事ニ考ヘル、ドウ云フ風ニ適合シ合フカ、原因ト事情ト丸キリ違ツテ居ルモノナラバ即チ水ト油ノヤウナモノデアアルナラバ決シテ一ツニハナラス、夫ガ一ツニ適合スル事ガ出来ルノハ、コチラノモノトアチラノモノト感シテ同フスル事ガ出来ルト云ハナケレバナラス、ソレヲ人間同士デ云ヘバ朋友同士互ニ信ジ合フ、コツチデ云ツタ事ガ向フニ通ズルト云フ事ガアル、是ガ若シ敵同士デアレバ何モ通ゼヌ、石ヲニツ寄セタヤウナモノナラバ感ジ合フ事ハ出来ナイト云ハナケレバナラス、夫ガ感ジ合フノハ朋友相互ニ感ジ合フト同じ事デアアル、総テノ人倫上ノ事柄ト云フモノハ此感ジ合ヒ応ジ合フ感応同合ト云フ事ガナケレバ決シテ奇麗ナ事ハ出来ヌデアアル、是ハ即チ人間ノ事デ末ノ事デハナイ、人間ノ間ニ行ハルル感ジ合ヒト云フ事ハ是ハ天地ノ法則デアアル、通常ハ動モスレバ物質ノ説明カラ分子ガドウダ微分子ガドウダト云フ所カラ云フト、人間ノ身体ハ幾ラカノ原素カラ出テ来テ居ル、人間ノ脳髓モ神経モ物質ノ原素カラ出来テ居ルト云フテ、物質ノ方カラ説明シテ人間ノ方ヘ来ルカラトツト説明スル事ガ出来ナクナ

――353

ル、唯物論ハ初メハ面白イケレドモ後ニハドツト行き詰ツテ仕舞フ、ソナ物質ノ論デハドウシテ吾々が感ズル事ガ出来ルカ、精神的ノ現象ガドウシテ出来ルカト云フ事ハ説明ガ出来ヌ事ニナツテ仕舞ツテ器械的ノ働丈ニナル、人間ヲ器械的ニ説明シテハ人間ノ首ヲ斬ルノハ大根ヲ切ルト同じ事ニナル、是ハ私ハ根本ガ間違ツテ居ルト思フ、根本ハ人間ノ知ル所ノ事デアアル、天地間ノ事ヲ知ルノハ人間ノ知ル所ガ知識トナルデアアル、シマスレバ人間ノ内デ最大切ナル働ハ最モ慥カナル知識ノ根底デアルト申サネバナラス、人間ノ働ノ内デ最モ根底トナルモノハ人間ノ相感ズルト云フ事ガ即チ根本デアアル、感ズルト云フ事カラ総テガ起ツテ知情意ト云フ事ニナツテ物ヲ知ルトカ動クトカ欲スルト云フ働ガ出来テ来ル、相感スル相応スルト云フ事ガナケレバ総テノ働ガ出来ナイ、ソレカラ推シテ往ケバ総テノ説明ガ出来ル、(洋盃ヲ指シ)斯ウ云フヤウナ器械的ノモノハ唯精神的ノ働ノ度ガ低イデアアル、植物ニ至テハ少シ高マツテ来タデアアル、動物ノ器械的ノ働モ夫ガモウ少シ高マツタデアアル、夫カラ人間ノ神経ノ働夫カラ精神的ノ働ト云フ風ニ同一種ノ働デアツテ、唯下等ナ所ト高等ナ所ト云フ違ガアル丈デ別ノモノデハナイ、此処デ通常ハ仏教上カラ申シマスレバ所謂万物唯心ヨリ外ハナイトカ万法唯識ト云フ事ヲ申スベキデアリマスルケレドモ、其方ノ道ヲ辿リマスヨリハ今ハ吾々が感ズル事ハ天地間ノ根本ノ働ト云フ所ニ坐リマシテ其感スル時ニハドウデアアルカト云フト、此二ツノモノガ互ニ相感ズルト云フ事デアアル、

互ニ相感ズルト云フ時ニハ通常向フカラ刺激ヲシタカラコツチガ感ズルト云フヤウニ向フカラトカコツチカラトカ申シマスガ夫ハ間違デアル、サウ云フ具合ニ向フカラ刺激シタカラコツチガ感ズル、コツチガ刺激シタカラ向フガ感ズルト云フカラ今日ノ学問上ノ理窟ガ立タヌヤウニナル、経験論者ノヤウニ総テ経験カラ説明シテ、向フカラ刺激ヲ受ケルト云フナラバ是ハ受動的デアル、受動的デアルナラバドウシテモ活動的ト云フヤウニ云ヘナイ、経験ガ根本ナラバ受動的ガ根本デアツテ幾ラ煎ジ詰メテモ経験的デアルガ、サウデナイ活

――354

動的デナケレバナラナイ、或時ハ受動的或時ハ活動的ト云フ事ハナイ、ドウデアルカト云ヘバ受動的デモ活動デモナイニツノモノガアルトシマスレバ其モノガ互ニ同ジヤウニ感じ合フ、夫ガ因縁デアル、其感ズルノハコツチガ前キニ往ツテ待テ居ルノデナイ同時ニ感じ合フ、同時ニ感じ合フト云フ事ハアツチニモ一種ノ有様ガアルコツチニモ一種ノ有様ガアル夫ガーツデアルカラ感じ合フト云ハナケレバナラヌ、サウ申セバドコデモ差支ナイ、ソレヲアチラカラトカコチラカラトカ云ヘバ必ズ説明ニ窮スル、ソコデサウ云フ事ニ止メズシテ、之ヲ歴史上ニ見マスト云フト此問題ガ非常ニ人ノ頭ヲ苦シメタノデアル、私共ガ仏教ノ参考ニシマスルノニ哲学ガ都合ガヨイカラ哲学ノ話ヲ少シ聞キマシタガ、近世哲学上ニ於テノ大問題ハ何デアツタカト云フト此点デアル、でかーと、すびのぞ、らいぶにっつ、皆ナ此ニツノ点ノ働ト云フ事ノ説明ガ出来ナクッタ、夫ハドウカト云フト何時デモコツチカラドウトカアチラカラドウトカ云フ風ニ往カウトシタ、ドウシテニツノモノガ往クカト云フニ、此物ト此物ト相感じ合フト云フ所ニ一ツ根底ヲ置カナケレバナラヌコチラニアル事トコチラニアル事ト同ジ事ガアルト云フニハドウ云フ訳デ同ジ事ガアルカ説明シナケレバナラヌ、ソレヲ上帝トカ天帝トカごつどトカ云フテ説明シタ、所謂耶蘇教ニ於テ神ト云フモノハ天地万物ヲ創造スルト云フ事ガアルソレヲ基トシテ説明シタ、天地万物ハ千差万別ニナツテ居ル、夫ヲ煎シ詰メルトニツニナル、ニツカラーツト云フ事ハ六ヶセイ事デアルガ、其一ツハ何デアルカト云ヘバごつどト云フモノデアル、神ト云フモノデアルト云フテ、其神ノ創造ト云フ所カラ説明シヤウト思ツタ、ソコデ神様ト云フ事ノ説明ニ困ツテ到頭後ニハ神様ト云フ事ヲ叩キ伏セル事ニ掛ツタ、ソコデドウ云フテ来タカト云ヘバ、コチラノ物ノ中ニ神様ガアル、コチラノ物ノ中ニモ神様ガアツテ、其神様ハーツデアルト云フ事ニナツテ来タ、斯ウ云フ事ハ御参考ニ申シテ置キマスルガ、

サウ云フ事ハ措テ因縁ト云フ事ニ就テ申シマスルト、因ト縁ト云フモノノ働ハドウシテモコチラトコチラニ同ジ物ガアル、

――355

夫ガ互ニ感じ合テ同ジニ働クト云フ事デナケレバ説明ガ出来ナイ、サウシテ見レバ先ヅニツノモノガ働ク、其働クト云フ所ニハーツノモノト云フ根本ガアルト云フ事ニナツテ来マスル、其物カラ此物ト云フ風ニ順々ニ関係ヲ附ケマスト、総テノ物ハ今日働テ互ニ感じ合テ居ル、其物ノ根底ガーツデナケレバナラヌ事ニ落ちテ来ル、ソコデ今日ノ天地万物ガ色々ニ離レテ居ルケレドモ、夫ガ其実一ツデアルト云フ事ハ因縁ノ理法上ドウシテモサウナケレバナラヌ、夫ヲ仏教デハ差別即平等ト云フ、差別ハ色々立テ居ルケレドモソイツガ平等一体一ツノモノデアアル、サウ云フヤウナ所カラ見マシテモ吾々ノ弊害ハドコニアルカト云ヘバ、御互ガ別々ノモノデ人々違フテ居ルト思フ所ガ御互ノ弊デアル、夫デ先ヅ我ト云フモノト彼ト云フモノヲ立テテ、我ノ権利彼ノ権利ト云フモノヲ立テル、権利ヲ御互ニ立テルハヨイガ一方ガ他ノ権利ヲ侵ストメチヤメチヤニナル、又財産モ人ノ財産我ノ財産ト別ニシテ居ル内ハヨイガ、夫ヲ一ツ他人ノモノヲ取ラウト云フ事ニナルト大変ニナル、社会上ノ罪惡道德上ノ罪惡ト云フ事ハ、此我ト彼ト其境界ハアリナガラ其実ハーツノモノデアルト云フ事ヲ忘レテ、唯境界ガアルト云フ事ニ主眼ヲ置テ、其境界ヲ拡メヤウト云フ事ヲスルカラ争ガ出来テ来

ル、夫ヨリ外罪惡ノ根本ノ説明ノ仕方ハナイ、夫デ仏教者ノ如キハドウ云フ事ヲ云フカト云ヘバ、先
ヅ我ト云フモノヲナクセヌケレバナラヌ、我ト人トノ間ニ非常ナ軋礫ヲ生ジ、我ト人トノ張合ヒ上カラ
総テノ罪惡ヲ生ズル、此根本ヲ退治シテ仕舞ハヌケレバナラヌ、ソコデ今日我々ガ道德ノ事ヲ申ス
ニ、極ク近イ所デ申スト四海兄弟トカ万民同胞トカ仁義礼智トカ云フ事ヲ云ハナケレバナラヌ、道
徳ハ唯彼ノ苦樂ハ我ノ苦樂、我ノ利害ハ彼ノ利害、天地間ノ利害苦樂モ皆ナ我ガ利害苦樂デア
ルト斯ウナツタ所デ初メテ真正ノ精神教育ノ根本ガ立ツト思フ、夫ヲ傍ニ見テ居ツテ、是ハ人ノ事
デアル是ハ彼ノ事デアルト申セバ精神上ノ根本ガ立タヌ、夫デ先ヅ根本ヲ申セバ我ト人ト別ニナ
ツテハ居ルガ互ニ一ツノモノデアルト云フ事ノ結着ガ定マラヌケレバ、……夫ヲ信ジテ掛ラヌケレ
バ真正ノ

――356

精神上ノ根本ガ立タヌト思フ、

8

併シナガラ夫ハ口ニ謂ヒ易クシテ甚ダ行ヒ難シ、モウ早ヤ私ガ斯ウ申シテ居ル言葉ノ内デ、私トア
ナタ方トノ區別ヲ見テサウシテ直グソレカラ色々ノ間違ヲ起シツツアル、私ガ若シ自分一人限リデ
自分ノ室ノ中ニ居ツタナラバ、モウ早ヤ草臥レタカラ横ニゴロリトナリサウデアアルケレドモ、アナタ方
ノ前デアアルカラスウヤツテ居ル、是ハアナタ方ニ束縛セラレテ居ル、私ガアナタ方ヲ眼中ニ置カズ
シテ天地広野ニ居ルガ如ク思フテ私ガ斯ウヤツテ居ルモノナラバ私ハ可ナリ道ニ於テ進ダモノデ
アル、所ガ賭ザル所ヲ戒慎シ聞カザル所ヲ恐催スト云フ事ハ出来ヌミナラズ独ヲ慎ム事ガ出来
ナイ、夫ガ差別ヲ見テアナタ方ノ前デアアルカト云フテ自分ハ四角張テ居ル、今日ハ教育大会ノ
御席デアアルカト云フテ辛棒シテ居ル、サウ云フ事ハ甚ダ苦シイ事デアアル、サウ云フ事ガ苦マズ
シテ洒々落々トシテ自由ニ出来ル所デ夫ガ徳者デアラウト思フ、サウデナクシテ斯ウ云フ場合デ
アルカラスウ云フ事ヲヤツテ居ルト云フノハ偽道德トマデ云ハヌデモ作ツタ道德ト云ハナケレバナ
ラヌ、夫デハ真正ニ心ガ固マツテ居ラヌト云ハナケレバナラヌ、併シソレハ自分ガ信ズルト云フ所
カラモウ一步進デ、信ジタ所ガ明ニナツテ夫ニ終始適フト云フヤウニ勉ムル事ガナケレバサウ云フ
事ニ至ル事ハ出来ナイ、ソレデ自分ガ信ズル所ヲ得テ、其信ズル所ヲ日夜朝暮トコ迄モ行ヒ及ブ
ト云フ事ヲ勉ムルガ非常ナ大業デアルト思フ、ソレハ実行上ノ事ニナリマスガ、先ヅ大体因縁果ト
云フ理法カラ云ヒマスレバ大体根本ハ一ツデアルト云フ事ヲ信ゼヌケレバナラヌ、天地万物ハ一
体デアルト云フ事ヲ信ゼヌケレバナラヌ、天地万物ハ一体デアルト云フ事ヲ信ズルニハ天地万物
ガ別々デアルト云フ根本ヲ払ハヌケレバナラヌ……天地万物ヲ一緒ト云フ事デ仏教ガ誤解セラル
ル事ガアル、仏教ハ差別ト云フ事ヲ打払ツテ平等ト云フ事ニ思フト云フ具合ニ取ラレルガサウデハ
ナイ、差別ハ一ツツノ物ハ独立ノ存在デアアル独立ノ実物デアルト云フヤウニ思テ居ルガソレハイ
ケナイノデアアル、ソレヲ払テ仕舞ハヌケレバナラヌ、其真正ノ体ハ何かト云ヘバ其物ハサウ

――357

別々ノ物デハナイ一体ノ物デアルト云フ事ニナリマス同時ニ、其一体ノ物が其儘色々様々千種
万種ニ現ハレテ来ル、ソコデ實在論ノ云フヤウニ現象ハ千差万別ニ分カレテ居ルガ其実ハ一ノ実
在デアルト云フ、斯ウ云フ理論ヲ以テ来ヌケレバナラヌケレドモ実行上ニナリマス平生我々ハ差
別一方ニ片寄ツテ居ル、人ハドウデモヨイ自分ガ死ヌ事ハ恐イト云フ事ニナツテ居ル、是ハ間違
デアアル迷デアアル、迷デアアルケレドモ動物植物杯ハドウデアアルカト云ヘバ其実例ガ幾ラモアル、植
物界ハ少シ怪シイガ、動物界ノ今日マデ進化シテ来タ歷程ニ於テ幾ラモ実例ガアル、人間ノ今日
ノ目的ハ自己保存ト云フ事ガ根本デアアル、先ヅ自分一人ヲ大切ニスル事ガ根本デアアル、道德上
自利ト云フ事ガ根本デアアル、自分ヲ利スル外ニ我々ノ希望ハナイノデアアル、夫ガ千變万化シテ今
日ノ同情トカ仁愛トナツテ来タト云フ事ヲ説キマス、ソレハ事実上歴史上或ハ進化論上ニ於テハサ
ウナケレバナラヌケレドモ、歴史上進化論上ニ依テ立テ得ル論ト云フモノハ實際ヲ去ル事ノ遠イモ

ノデアル、是レニ就テ私茲ニ一論アリマス、御邪魔カ知リマセヌガー一寸前ノ説ノ根底ヲ破ラレナイヤウニ防禦ヲスル為メニ申サヌケレバナラヌ、進化論トカ文明論トカ云フモノハドウ云フカト云ヘバ、昔ハ極ク下等ナ野蛮デアツタ、夫カラ段々開化シテ今日文明ノ我々トナツタト云フテ、サウシテ我々ノ働ノ根本ガドウカト云ヘバズツト原カラ通ジタ働ガアツタ、其働ガ根本ノ働デアルト云フガ、是ハ可笑シイ、其事ヲ云フナラバ我々が極ク下等ナモノデアルト見テ、我々が極下等ナ時分ニアツタ所ノモノガ我々ノ最モ大ナルモノデアルト云ハナケレバナラヌ、根本ト云フ事ノ云ヒ方ハ余程可笑シイ、唯道行キニ於テハサウナツテ来タケレドモ、ソレハ若シ向フヘ行くベキモノシテ其向フヘ往ツタ時ニハ其間ヲ往ク所ノモノノ根本ノ大切ナル性質ハ何デアルカト云ヘバ向フヘ往クト云フ事ガ根本デアル、向フヘ往クガ為メニ之ヲ初メテ来タ、若シ此処カラ初メテ其時現ハレタ働ガ根本デナイカト云ヘバ、成程現ハレタ上ニ於テハ一番初メニ現ハレタト云フ丈デス、ソレガ何ノ為メニサウ云フ働ガ現ハレタカ

――358

ト云ヘバ向フヘ往ク為メニ現ハレタノデアル、我々が今日マデ人間ニナツテ来タノハ何ノ為メカト云ヘバ、我々ハ是ヨリ未ダ高等ニ進ミ往カンガ為メニ今日マデ進デ来タ、サウスレバ我々ノ性質ハ根本ニ達スルト云フノガ其根本デアル「天ノ命ズル之ヲ性ト云フ」性ニ還ラヌケレバナラヌト云ヘバ、我々ハ性ト云フ事ニ重キヲ置テ夫ガ少シデモ現ハレテ来タレバ、ソコデ初メテ現ハレテ来タト云ハナケレバナラヌ、我々が人ト話ヲスルニ天氣ノ話カラ初メテ偕[さ]テ今日ハ斯ウ云フ要事ガアツテ伺ヒマシタ、要件ハコウコウデゴザリマス云フ時ニ、其人ガソコニ現ハレテ来テサウ云フ色々ノ話ヲシタ根本ハドコニアルカト云ヘバ其一要件ヲ満足スルガ為メニヤツテ来タ、其色々ノ挨拶ハ方便デアル、根本ハ唯一ノ要件ヲ達センガ為メデアル、サウスレバ今日ノ我々が根本ト云フベキハ何デアルカト云ヘバ、我々が抑モ初メカラ活動シ出ス根本ノ土台ハ即チ完全ニナルト云フ事ガ土台デアツタ、完全ニナルト云フ事ハ自分ヲ愛スルト云フ事デナイ、自分ヲ忘レテ我ト人ト同一体ニ見ルト云フ事デアル、ソレガ最初ノ働デアルト見マシタナラバ、其働ガ少シ斗リデモ今日現ハレテ来タナラバ、其少シノモノハ是ハ人間ノ根本ノ性質デアル、人間トシテハ之ヲ根本トシナケレバナラヌ、所ガ動モスレバ文明論トカ進化論トカ云フモノハ調子ガ間違フヤウデアル、加藤弘之先生ノ自利ノ説ハ私ノ信ズル所デアル、アレハ進化論ノ上ニ何カ一番初メニ現ハレタカト云フ事ヲ云ヘバ、昔ノ歴史ヲ調べテ云フカラサウ云ハナケレバナラヌ、所ガ動モスレバ之ヲ實際ニ持テ来テ今日ノ我々ハ競争淘汰優勝劣敗デ進デ来タカラ、是カラ後モ優勝劣敗デヤラナケレバナラヌト云フナラバ間違テ居ルト思フ、競争淘汰優勝劣敗ト云フ事ハ今日マデ我々が進デ来ル迄ニ現ハレタ所ノ主義デアル、是カラ前キヘ進ム主義デハナイ、今日マデハ我々ノ知識ガ夫程進マズニアツテ、唯自然ニ支配セラレテサウ云フ具合ニ盲ラ滅法界ニヤツテ来タガ、今日我々ノ思想ニ道德的宗教的ノ精神ガ出テ来タナラバサウ云フ精神ヲ以テ働カネバナラヌ、サウ云フ風ニナツテ来ナケレバ實際上進歩ノ教デナイト思

――359

フ、ソコデ其上ニ於テドコ迄モ進ミドコ迄モ進メルト云フ事ガモウツ出テ来テ、サウシテ我々ノ精神ガドウデアルカト云フニ此精神ハドコ迄モ進メルモノデアル、ドコ迄モ進ダ上ハドウナルカト云フニ是ハ仏教デ説テ居ル事ニナルトソコハナカナカ愉快ニナツテ居ル、我々ノ精神ト云フモノガズツト進メバ天地万物ハ一モ外ノモノデナイヤウニナル、一切ノ生キタモノハ一人モ他人デナイヤウニナル、天地万物ハ皆ナ我有デアル、一切ノ生キテ居ルモノハ皆ナ我子デアルト云フヤウナ具合ニナル、ソレガ最後ノ有様デアルトシタナラバソレニ依テツ我々ハ精神ヲ鍊ラヌケレバナラヌ、我々ノ今日ノ有様ニ於テ我々が其事ヲ思ヒ、幾ラカソレニ従テ働ク事ガ出来ルトスレバ益ス精神ヲ奮ヒ少シモ早くソレニ到ルト云フ事ガ我々ノ本分デアラウト思フ、ソレカ徳育デアラウト思フ、

サウスレバ徳育ト云フ事ハドウ云フ事ヲ思テ行ケバヨイカト云ヘバ、我々ハ最上無限ニ発達シ得ベキト云フ事ヲ信ジテソレニ向ツテ精神ヲ鍊上ゲナケレバナラス、サウ云フ時分ニ手近ク云ヘバ、今申シタ如ク悉ク自分ノ有デアルト云フ事ニナレバ随分天地ノ物ニ対スル我々ノ働モ違ッテ来ルト思フ、禽獸迄モ自分ノ子ト云フテ来レバ今日云フテ居ル道義トカ徳義トカ云フ觀念ハ湧然トシテ涌イテ来ルト思フ、サウ思ヘバ今日迄肩ヲ張合ツテ怒リ合テアツタモノガ和氣霞然トシテ互ニ肱ヲ取テ語ルトカ、今日マデハ向フノ人ヲ罪人デアルト思テ居ッタノガ自分ガ悪ルカツタノデアルト云フ具合ニナツテ、向フノ人ニ罪ヲ被セテ居ツタノヲ謝セナケレバナラス事ニナル、サウスレバ今迄敵同士デアツタモノガ其考ヲ止メテ非常ニ親シクナツテ来ヌケレバナラスト思フ、サウ云フ事ヲ左右ノ事ニ当嵌メテヤツタナラバ、今日迄我々ノ思テ来タノハ少シ調子が違ツテ居ツタト云フ事ハ實際出テ来ヌケレバナラス、夫ハ已ニサウ云フ御経験ノアル方々デ見レバ私ガ申スノハ余計ナ話デアリマスケレドモ、或ハ又サウ云フ御考ノ最中ノ御方モアルカモ知レヌ、私モ未ダサウ至ラス、サウアラヌケレバナラスト思フガ實際私ガ自分ニ妻子眷属ヲ相手ニシテ居ツテ何かヤルト腹ガ立ツケレドモ、其時ニ今

――360

ノ宗教的ノ考ヲ以テ見ルト腹ヲ立ツノハコツチガ悪ルト云フヤウニ自分ヲ責メルヤウニナル、サウスルト存外向フガソレニ依テ改メテ善クナルト云フ事ガアル、ソレデ其道ヲ信ジテ御居デノ方ハ沢山アラウト思フガ、兎モ角モサウ云フ風ニ個々別々ト云フ事ヲ思ツテ、其間ニ境界ヲ立テテ財産トカ生命トカ云フ事斗リヲ鍊上ゲテ居ル所ノ考ハ一変シナケレバナラス、其一変スル所ヲ名ツケテ仏教ノ方デハ転迷開悟ト云ヒマス、転迷開悟ト云フ事ハ別ノ事ヲ云フノデナイ、サウ云フ調子ノ変ル所ヲ転迷開悟ト云フ、今ノヤウナ事ヲ沢山書イテ居リマス、一切ノ衆生ハ悉ク最上無限ノ仏ニナル性質ガアルト云フ事ヲ申マス、又夫ヲ拈ゲテ云ヘバ我々トカ禽獸トカ生キテ居ルモノ斗リデナイ、斯ウ云フ花デモ瓦デモ今ハ進化ノ程度ガ低イデアリマスガ、段々進化シタナラバ矢張最上無限ニ発達シ得ベキモノデアル、一ノ色ト我々が感じ、一ノ香ト感ズルモノモ最上無限ニ発達スベキ真理ヲ備ヘテ居ル、モウ一ツ云ヘバ我々ノ心一ツノ思ヒト云フモノハ中ニ非常ナル道理ガ籠ツテ居ル、ソレガウマク開ケバ即チ天地万物ヲ組立テタヤウニナル、斯ウ云フ事ヲ申スト奇怪不思儀ナ事ヲ申スヤウデアリマスガ、併シナガラ道理デ推シテ往クトドウシテモソコヘ来ヌケレバナラス、併シサウ云フ事ヲ余リ云ヒマスト唯同ジ疑問ヲ繰返ス斗リニナリマスカラ、最後ニ物ノ値打ト云フ事ヲ今ノ道理カラシテ申上ゲマシテ夫デ御暇ヲ致サウト思フ、

10

此一ノ色一ノ花一ノ香ガ無上ノ性質ヲ備ヘテ居ルト云フ事ヲ申シマシタナラバ、其モノハ無上ナル値打ヲ有タモノデアルト申サヌケレバナラス、サウ云フ風ニ申セバ大變遠イ事ニナリマスガ、今日我々が實際感ズル所ハドウデアルカ、此頃東京ニ居リマス友人ノ話ヲ聞テ感じマシタ、或人ガ朋友ガ来タカラ菓子ヲ出シタ、其人ハ平生菓子ノ好キナ人デアツタ、ソレガ四五年振りニ来タカラ菓子ヲ出シタ所ガ一向食ハナイ、君菓子ヲ食ヒ玉ヘト云フテモヘイト云フテ居ツテ食ナイ、何故食ハヌカト云ヘバ勿体ナイト云フ、前ニハ菓子ガアレバ我先キニト食ツタモノガ勿体ナイト云

――361

テ手ヲ出サヌカラドウ云フ事ヲ感じタカト云ヘバ、此頃自分ハ非常ニ困難ヲシテ居ツテ、或時旅行ヲシテ夜ニナツタカラ泊マル事ノ必要ガ起ツテ来タ、所ガ宿屋ハ高クテ泊マレナイ、唯五厘アレバ木賃宿ニ泊マル事ガ出来ルガ、其五厘ガナカツタカラ山ニ野宿ヲシテ蚊ニ喰ハレテ苦ムダ、其時五厘アレバ其苦ミヲ免レタノデアル、所デ此菓子ハ一個壱錢以上モスル菓子デアラウ、アノ困難ヲ思遣ツテハサウ云フ菓子ハ食ヘナイト云フタト云フ事デアリマス、斯ウ云フ所ガ吾々ノ精神ノ心機一転ト云フ所デアル、菓子ニドレ丈ノ価値ガアルカト申セバ今日經濟上デ需要供給ト云フ所カラ六ヶシク論ズレバ価値ガ出テ来マセウケレドモ、モウ一ツ精神上ノ値打ガアラウト思フ、精神

上カラハ壹錢ノ菓子モ非常ナ値打ニナル、総テ天地万物ガ其通りデアアル、小供ノ如キモ此小供ハドレ丈ノ値打デアアルト云フ事ハ極ツテ居ラス、コツチデ見テ値打ヲ附ケル事ガ出来ヌ、是ハ他日非常ナ人物ニナルニ違ヒナイト思ヘバ其人物ガ何トナク貴重ニ見エル、果シテ英雄豪傑大人君子ニナル種ガアルカト云ヘバ王侯将相焉ゾ種アラnde決シテ種ハナイ、ドンナモノガ異日如何ナル大人物ニナルカモ知レナイ、ソコニナリマス人物ハヨイ加減ニ評価スベキモノデナイト思フ、夫ト同ジ事ニ我々ハ自分自身ヲ漫リニ評価スベキモノデナイ、大抵人ハ一番始メニ申シタヤウニ自分自身ヲ評価スル事ガ間違フテ居ル、其間違ノナイヤウニ我々ハ貴重ナル値打ヲ備ヘタモノデアアル、千古万古開発シテ滅シナイ性能ヲ備ヘタモノデアアルト云フ所ノ精神ヲ以テ来タナラバ、自分自身ノ値打ガ非常ニ違フテ来ルデアラウ、其違フテ来ル精神カラシテ我々が毎日ノ働ヲ致シテ来ルヤウニナツタナラバ、ソレデ初メテ我々が今日申シテ居ル所ノ徳育トカ宗教々育トカ精神教育ト云フ目的ヲ達シ得ルト思フ、

先ヅ斯ノ如ク申シ述ベマスルト云フト、因縁果ノ道理ガ確カナ事デアレバ我々ハ非常ナル値打ヲ有シタモノデアアル、完全無限ニ発達スベキモノデアアルト云フ事ガ是非起ツテ来ル、其完全無限ニ達シ得ベキモノデアアルト云フ事ガ真ニ信

――362

セラレテ、夫ヲ以テ自分ガ行ヲヤツテ往クト云フ、是レガ今日ノ我々ノ信仰上カラシテ徳育ヲ立テテ往ク根本デアアル、此事ハ真ニ其事ヲ信ズルト信ジナイトニ依テ働キノ違フ事デアアル、是ハ幾ラ申シテモソレハ言葉ノ上ニ現ハセルモノデナイト思フ、若シ幸ニ幾何カソレガ御参考ニナル事デアレバ実ニ望外ノ幸福デゴザリマス、真トニ話ラヌ事ニ下手ノ長談義ヲ致シマシテ清聴ヲ汚シマシタ、